

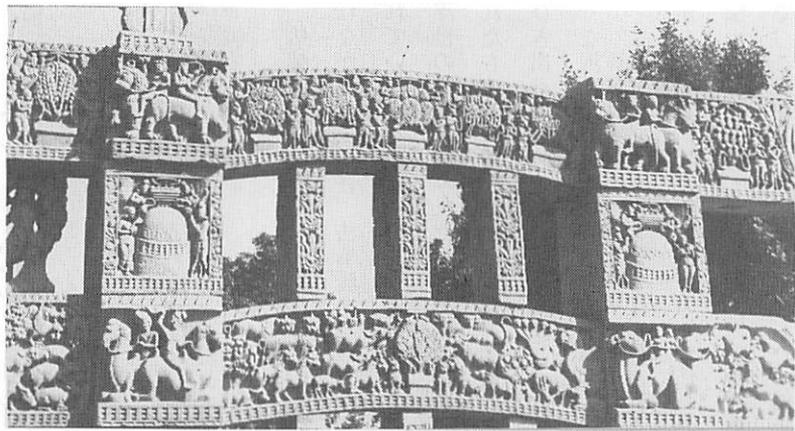
# カニシカ仏陀コイン「掌中の珠」の意味するもの

高 橋 堯 昭

## ①

仏滅後仏像はなかった。インドでは尊いものは表現出来ないという考えがあったからである。經典も文字で表現されなかった。現在、法華經あり般若經あり、又阿含經があつて、いずれが仏説かはつきりしないが、もし文字で表されていたらバイブルのように一冊ですんだであろう。然しインドでは、例えば借金の契約書などにつかわれていた、浮世の欲望にまみれた文字で聖なるものは表現出来ないという考え方があつた。為に暗記していた。然しその記憶されたものは時間が経つにつれて変わつて来た。これに対し何度も何度も「結集」といつてこれら經典の中の共通点をひき出そうとしたが、「かくの如く我聞き（如是我聞）」と自家の伝統を固執し、相争つて収集がつかず、現在見るような沢山の經典が出来てしまった。

これと同じように、仏の像も作られなかった。聖なるものを、欲望にけがれた人間の姿で表すことは出来なかったからである。故に釈迦がその下で悟つた菩提樹や舍利を祀つたストウーバ、或いは釈尊ゆかりの品々、即ち托鉢の鉢や法衣或いは、仏足を彫んだ石を釈尊として礼拝していた。この代表的なのがサンチーの彫刻にある菩提樹や仏塔で、これを通じて釈尊を表現した。例えば過去七仏を表す彫刻が門に彫られて居る。樹はいろいろ葉の様子が違つて



1 サンチー 第一塔 東門背面上部

いて、それぞれの樹の特徴によって七仏を表現している。(写真一) このように聖なるものを菩提樹で表し、これを礼拝していた。これは インドス文明以来の伝統で、即ちインドス文明のシールに樹に座す樹神が彫られている程で、古来インドには聖なるものを樹で表す考え方、即ち樹神信仰<sup>2</sup>があつたから、仏陀の代わりに菩提樹が彫られ、仏像が出来た後にも仏像のまわりに樹<sup>3</sup>が彫られていた。

こうした釈尊を表現しない伝統の所へ、違った文明をもつ民族が入つて来た。即ちアレキサンダーの東征以来住み着き、又セレウコス朝(シリヤからインドスまで)、そしてその後のインドグreek等のギリシア文明をもつた民族が入つて来た。更にギリシア人の後にサカ・パルタイ等ギリシア文明の影響を受けたベルシア系の民族種族が相次いで北西インドに侵入して来た。ギリシア文明は、あの美しいギリシアの彫刻、バルティノン神殿、ミロのヴィーナス等々の美しい彫刻を作り出した伝統をもつた文化である。即ちインドグreek以来、インドに相繼いで侵入して来たサカ・パルタイ、そしてクシヤン民族はギリシア文明を教養とし、その文明を金科玉条<sup>4</sup>としていた。為にクシヤン朝時代に、カニシカ王の時代か、或いはその直前に仏像が作り出され



カニシカ 仏陀コイン「掌中の珠」の意味するもの

ていた。写真二の如くカニシカのコインに仏像が彫られているからである。ちなみにカニシカの治世は約AD130年から150年の約二十年間であるから、それ以前に仏像の単独像は作られていたことになる。

即ち「ポドー」とコインにはつきり銘打たれた仏陀の像が彫られているからである。だから聖なるものを偶像化・対象

化するといふ今まで否定されてきた立場と違った文明が入って来たことがわかる。従つて当時は相当に抵抗があつたろう。例えばガンダーラとほぼ同じ時代にマトウーラに於いて仏像が作られていたが、猶「菩薩の像を作つた」とわざわざ但し書きをしていることでもわかる。異民族・異文化の共存するガンダーラと違って伝統が色濃い中央インドに近いマトウーラでは、形は仏像そっくりなものを作りながら敢えてこのような但し書きをするには、よほどの心の葛藤・抵抗があつたに違いない。

そもそもクシヤン朝は遊牧民の伝統に従つて生活していた。即ち

### 3. 最初期ギリシヤ的菩薩象 (ADIC初頭)



カニシカの都は夏はカピシ（アフガニスタンのカーブル北東）、冬はあたたかいデリー南方二百キロのマトウーラ、そして春・秋はガンダーラのペシャワールと移り住んだ。為にガンダーラで仏像が作られたとするとほぼ同時にマトウーラで作られたと想像される。然し聖なるものを対象化・偶像化するに對してはやはり仏陀の方は心の抵抗があつて、最初は菩薩の像であつたと想像される（写真三）。即ち前述の如き「ただし書き」から想像できる。やがて像が一旦出来ると、堰をきつた水の如く仏の像まで作られるに至つた。これが仏陀でありながら「菩薩」と銘打つた由縁であり、これ程の心の抵抗がインドの伝統に生きる人々の感情であつた。

かくして仏像が出来た。このプロセスにはいろいろの説がある。即ち彫刻に秀でたギリシヤ的な彫刻手法によつて、まず「群像」が出来た。即ち「仏陀と信者の群」である。その中に仏の像が作られた。然し同じ大きさでは仏陀は信者と区別が出来ない。そこで後述の「円光背」とか「白毫」で仏陀を表現する手法が考えられたが、一番簡単なのは仏陀を大きく表現することであつた。かくて仏陀はどんどん大きくなって遂に群像からとび出し、単独像が出現したという説である。

もう一方では、仏陀はもともと単独像から出発したという説である。ペルシヤ的な考え方では神からつかわされた人間は、神の代理として国王となる。スルフコタルやマトウーラから出土しているたくましいカニシカの立像の如く、王は神に「王権神授」されたものとして考えられていた。例えばカニシカのコインの裏面の神はリボンのついたリングをもつて表のカニシカに与えようとしている例が多くあるからである。大唐西域記アフガニスタンの記事の中に国王は肩から火を出して悪竜を退治して国民を幸福にするという記事がある。肩から火を出して悪竜を退治した王とは神に委任されて政治を行う、即ち神の代理者である。否もつと徹底すると神と同じものである。だからカニシ



4 アルケサス朝ペルシャ フラーテス I V 銀貨 (田辺氏蔵)

カの像はたくましい偉丈夫の像に彫られている。この国王になぞらえて仏陀の像が出来たという説である。

こうした群像からの単独像出現説か、王権神授によるペルシア影響起源説か、のいずれかは浅学の私にはわからない。然し、仏像が出来たことは事実である。無仏から有仏の時代になったのである。然して一旦仏像が出来ると、人々の心の理想像を仏陀に投影して、美しい像が出来て来た。その民族その種族の美の理想像を投影し仏陀像としたのである。例えばアンコールワットの仏陀像の鼻があぐらをかいているのは、カンボジアの民族にとつての美の永遠の理想像を仏として表現したのが、アンコールの仏であった。はた又、同じガンダーラ系の仏菩薩像でもガンダーラ中央部・スワット、そしてデイル出土のもの、或いはアフガニスタン・中央アジア(現ソ連領内)と民族種族が違っていると夫々の民族種

族の理想像の投影が各地の仏陀像となったといえよう。

②

然して仏と信者を区別する為に仏像作者は仏を象徴するものを考え出した。それが円光背や白毫であった。然し、この白毫は仏教特有のものではないと筆者は思う。古来仏教学者が經典から参照して白毫のインド起源説を唱えてきたが、筆者がイラク・イラン等の西アジアを旅し、博物館で古い神像やコインに彫られた王の頭部を調べるに及んで、西アジア影響説をとりたいたい。例えばアルケサス朝ベルシアの諸王のコインをみると、オローデス二世 (BC38-33) フラーテス四世 (BC38-3) (写真四) フラータケス (BC2-AD4) ヴァダネス一世 (AD40-45) ヴォノーネス二世 (AD51-54) ヴァルダネス二世 (AD55-58) ヴォロガセス一世 (AD51-78) 等々の王の額には「イボ」「小さな穴」が彫られている。これは、ガンダーラ仏やクシヤンのコイン上の王の肖像よりずっと早い時代で眉間 (眉間といっても正面ではなく、横向きだから正面中央に書けるわけではないが) や目の上に白毫が彫られている。又アルケサス朝パルティアの首都ニースから出土した大理石の女神像 (BC2-1C) の頭部正面に白毫が彫られている。更にもっとさかのぼったバクトリア (西トリキスタン) の諸遺跡から出土したテラコッタの女神像達の両側のほつべた、或いは額に◎の印が彫られている。<sup>13</sup> その他こうした例は数多くある。これからみると、イランや中央アジアで聖なるものと人間とを区別する為、何かしかのマークを付けたことがわかる。ゾロアスターが生まれる時フファルナフが入胎し<sup>14</sup>、ミトラデススエウパター (ポンティアック王国 (BC125-50) の生まれる時コメットが七〇日間続き、彼の誕生を示し、雷光がゆりかごに落ち、彼を傷つけることなく、額に跡を残した。<sup>15</sup> とベルシアの古典は示している。これがカニシカやフヴィ

カニシカ 仏陀コイン「掌中の珠」の意味するもの

カニシカ 仏陀コイン「掌中の珠」の意味するもの

シカのコイン上の顔の横に穴があいたり、小さな「イボ」が作られているのに通ずる。

特に前述の如くクシヤンのコインで裏の神からリボン  
つきのリングを与えられる（王権神授）表の王は単なる  
王ではなく神の代理である。この為、額に白毫を付け、  
頭のまわりには円光背を付けるに至る。従って白毫も円  
光背も神的存在であることを示すものとなる。これを仏  
陀につけて、単なる人間ではなく聖なる存在、超越者と  
いうことを示すに至る。共にイラン等西アジア的発想で  
ある。

特に何度も述べたようにペルシアでは王権は神から与  
えられると信じられている。イランの摩崖の彫刻（写真  
五）<sup>(16)</sup>にこの王権神授の絵が彫られている。その神から王  
がリボンのついたリングを与えられるという図柄である。  
この神は頭に風船玉のようなものをかぶっている。フファ  
ルナフ即ち神性を表すものである。このフファルナフを  
神から与えられてはじめて王となる。従って王はこれに

5 アルダシュール一世 王権神授（ナクシェ・ルスタム）



カニシカ 仏陀コイン「掌中の珠」の意味するもの



6 ショトラク出土 焔肩仏 パリ ギメーミュウジウム蔵

よって人間ではなく神の代理、神に近い存在となる。単なる人間ではないことを表す為に王にフファナフを表す白毫や円光背がつく。特にダリユース大王の墓の上に、太陽の光芒をもつ鷲の羽根の上に神が座している。王は火をたき、右手を挙げて従順を誓っている彫刻がある。この太陽の光芒が神の象徴であり、これを王も分与される。仏像の頭部にこの太陽の光芒を示す円光背がつくのは、こうした思想的影響からごく自然のことといえる。

③

仏・菩薩は右手を前につき出し掌を前にひろげたポーズで「施無畏」(写真六)をしている。施無畏印は体から前に右手を出している。現存する大部分の仏像や菩薩像は手が折れているから、このポーズが完全に残っているものはない。だから右手の折れている仏像の右手はすべてこの施無畏のポーズをとっていたものと想像出来る。

施無畏とは仏や菩薩が人々に「何ら恐れることはないよ」「この世の中の恐れるものを除去してやるよ」という仏の慈悲を示すポーズである。この右手を挙げるポーズももともとは西アジアの誓いのポーズである。

筆者の調査からこれも白毫とか円光背と同じように西アジア起源であると思う。即ちBC800年のハンムラビ王は神から法典を授与されて、これを人民に守らせ、社会秩序を正し、人々を幸福にさせますと誓うことを示す彫刻がルーブル博物館に残されている。王の右手はヒットラーの親衛隊の「ハイルヒットラー」のようなポーズをとっている。(写真七)その他、出土した王の像等や、或いはダリユース大王が神に誓っているポーズ等、西アジアにはこうしたポーズの像が数々ある。特にガンダーラに於いてAD2・3世紀に弥勒菩薩像が爆発的に彫り出されて来て、皆この誓いのポーズをなしている。然しインドの彫刻にはこうした形がないのは、このポーズが西側の影響といえよう。そも

カニシカ 仏陀コイン「掌中の珠」の意味するもの



7 ハンムラビ法典神授 パリ ルーブル博物館蔵

そも弥勒は仏滅後五十六億七千万年に出現して衆生を釈尊に代わって救済することを仏に誓う菩薩なるが故に、この誓いのポーズをとるのは当然である。

前述の如くインドには聖なる仏陀を彫刻（像）で表す習慣はなかった。仏陀は菩薩樹やストゥーパで表現されていた。そこへギリシア文化の洗礼をうけた民族が入ってきた。彼等はギリシア彫刻で仏陀を偶像化しなければ満足出来なかつた。さぞかし最初はギリシア人の工人か、ギリシアの芸術に堪能なペルシアの工人がいて仏像を作つたのであろう。かくて仏陀も彫刻された。然も前述の如く製作の順序から行くと菩薩像が先であり、仏像は後が自然である。特に、一時期、弥勒菩薩が爆発的に作られた。弥勒はインド本土ではなじみの浅い像で、これがガンダーラという地理的に西方、文化的にギリシア・ペルシアに近い所で非常に多く製作されたということから、然もこの地域にもともとミトラ神の信仰があつた<sup>20</sup>ということから、弥勒菩薩の信仰、その像の成立に影響があつたことが考えられ、これ又、西方的影響が十分想像出来る。

とにかく菩薩は仏に向かつて仏に代わつて人々を守りますというに誓願のポーズをとることであつたが。やがて仏像も誓願のポーズをとるようになった。仏陀像は普通は禪定印說法印等が普通であつたのが、誓願のポーズをとるようになった。仏教ではこのポーズはオリジナルには「相手に向かつて何も持つて居ませんよ。恐れることはないよ。」という無畏、恐れを与えないということになつてゐるが、西方的には、誓いのポーズに他ならない。「何も恐れることはないよ。」ということがやがて「恐れることのないようにしてあげるよ」というふうになつていく。仏の方から手をさしのべる救済・慈悲という方向に進化して行く。丁度母が泣き叫ぶ赤ん坊に手をさしのべるという方向に向かつて行く。かくて仏像も誓願のポーズをとるに至つた原因と考える。

そもそも右手に何ら  
 からの魔力・神力を  
 見る習慣は古来からあつ  
 たらしい。ガンダーラ  
 から出土した奉獻ストウー  
 パの壁面には「掌」右  
 手の手のひらをぺたぺ  
 たつけたように、ずら  
 りと並んで塔をとりま  
 いている（写真八）の  
 もあった。これと同じ  
 事が、かつて尋ねたイ  
 ランの南東部ケルマン  
 市郊外の拝火教徒の家  
 の中の聖所（日本の仏

8 奉獻小塔 Spik & son Ltd London



カニシカ 仏陀コイン「掌中の珠」の意味するもの



9 カニシカ 仏陀金貨（シンガポールオークション出品）

間のような所）にあった。壁は赤く塗られ、ここに白い右手がぺたぺたとつけられていた。これはテヘラン南西のヤズド市外モバラケ村の拝火教徒の家の聖所と同じで、沢山の手は「聖なる所だと示すもの」と家族の人は言っていた。<sup>22</sup>

これから考えるのに、右手に何かしら神秘的な力を蔵するという考え方が各所にあったことがわかる。現代、新興宗教が右手をあげて「気」を示すという儀式も同じ傾向であるかも知れない。こうした掌に神秘的な力を認める心理が、聖なる仏陀の右手には、一層感じられたのは当然の事である。これが仏陀の右手に特殊なシンボルを印するようになったのであろう。即ち右手の掌中に八十種好の八十番目の吉祥印が彫られて来たからである。平山氏蔵カニシカ金貨（写真二）の仏陀の右手の掌には、ぼっかり穴があいている。それだけではなく大英博物館のものや今はなきボストン美術館蔵のもやはり穴があいている。一方パリ国立図書館、シンガポールオークシヨ

ン出品（写真九）のもの、更には東京個人蔵のものには逆に突起がある。即ちはつきりイボ状の小球が手のひらに作られている。中には二重の円の中に小球のあるものである。現在五つしか残っていない仏陀のついた金貨の全部に、一方には小さな穴状のへこみ、他は突起状の小球、形は異なっている、共に何らかの意味を表す為、このような彫刻表現が出来た事は間違いない。

更に筆者はラホールの博物館内に復元されているシクリの仏塔のまわりの仏伝彫刻中、一番はじめの物語、即ち釈尊が人間界に生まれるきっかけをなす「燃燈仏授記」の彫刻中（写真十）、燃燈仏の施無畏印中の掌の中には円形のへこみがある。この説話から続く仏伝図中、施無畏印をしている仏陀の掌の中に凹みのあるのが二つある。

筆者はこれに類した施無畏印中の吉祥印のある例を極力集め、現在菩薩像二つを含め二十数例集めて来た。<sup>20</sup>こうした円形の凹みや円形突起がもつと発達裝飾化されて

カニシカ 仏陀コイン「掌中の珠」の意味するもの

10 シクリ出土 燃燈仏授記（ラホール博物館）



カニシカ 仏陀コイン「掌中の珠」の意味するもの

来て、花模様を示すものが数体<sup>24</sup>発見される。更にこれをもっと発展したのは、写真二のパリー・ギメー博物館蔵の焔肩仏とアフガニスタン・ショトラク出土カーブル博物館蔵（写真十一）の燃燈仏の右手の掌である。これは花模様と



11 ショトラク出土 燃燈仏授記（カーブル博物館蔵）

いうより、「法輪」「輪宝」と思わせるものまでであった。これらに止らず、もっともつと施無畏印の像の掌に吉祥印のあるものがあつたであろう。これは前述の如く、右手をさし出すポーズの手がとれていたり、ぼつきり右手がおられていたりしているのが非常に多くあり、残念ながら確認出来ない。

⑤

かく仏陀の掌の中にこのような印がなぜ作られたのであろうか。白毫はそれによつて國王が単なる人間ではなく王権神授によつて神に依託された、人間以上の存在であることを表現していることは前述した。菩薩も仏も人間ではない尊い存在<sup>as</sup>。ペルシア的<sup>as</sup>に言えばフアルナス（神性）を分与されたものだということを表す記号である。更に更にこの記号が右手に印されるということは、その右手が何かしら特別な意味を持つことを示しているからにはほかならない。特に吉祥印が円形の「へこみ」「突起小球」から「法輪」「輪宝」にまで徹底して来る所が注意されねばならない。前述の如く仏陀の「ひたい」の円形の「へこみ」「突起」も、白毫相として王や仏の超越者を示すものであつた。それを掌につけているのだから、仏の右手掌に一層の神秘力が強調されて来たことがわかる。そして又、更に更にこの印が「法輪」にまで徹底するのは、一層、その神秘力を強調したからであらう。法輪は、「仏の教え」である。「仏の教え」とは「仏の慈悲」に外ならない。すべてのひとから「恐れを取り除いてやる」という慈悲の心が、もともとは西アジア流の誓いのポーズという施無畏印のポーズに加えて、仏から人々に慈悲の御手を垂れてくれるというように徹底し、「誓願」を強調したのだと筆者は考へる。

繰り返すようだが、菩薩の施無畏印は未来に仏に代わつて衆生を救うことを仏に誓つたポーズである。このポーズ



12 カニシカ佛陀金貨の表（元ボストン美術館蔵）

が仏についたというのは、仏が人々を救うという願いを誓う「誓願」が強調されて来たからであると考ええる。更に更に、その右手の施無畏印中に白毫がつくのは、この「誓願」、仏から垂れて下さる慈悲の御手を強調したかったからと筆者は考える。仏の方から、上から下へと、民衆に救いの御手を垂れて下さる御仏の慈悲が強調されてであろう。

⑥

更にこれを別な面から考えてみよう。フヴィシカのコインに王が円光背をつけているのもある。王が神的存在となったことを示している。こうなると、裏面の神は王に「王権神授」する立場だから一層高い存在となる。これを表現するのに神の円光背の外側や内側に太陽の光芒を示すノコギリ状の光芒をつけて来る。<sup>26</sup>

王より高い地位を示す為である。こうした立場から見ると、前述のポストン美術館にあった仏陀像のあるコインの表のカニシカ王の頬には白毫に相当する小穴（写真十二）があるから、カニシカは神的存在となっている。為に仏陀は神的存在のカニシカ以上の存在となっていることは十分想像されている。このコインは約AD130-150年の間のカニシカの治政の間に作られているから、この時代に仏陀は最早、人間釈尊を超えて神的存在・超越者・救済者と考えられていたことになる。

これを裏付けるものとして、筆者はカニシカコイン上の仏陀の二重の頭光背と身光背が注目されなければならないと考える。即ちカニシカのコイン上の神々は頭光背しかもっていない。にも拘わらず仏陀のは、頭光背のみでなく身光背をもっている。これはどうしたことであろうか。然も平山氏蔵（写真二）、シンガポールオークションのコイン上の仏陀（写真九）も東京個人像の頭光背は二重になっている。これは又バリ国立図書館蔵のもの、かつて存在したポストン美のものも二重であり、他の神々と同じような一重の円光背は大英博物館のもののみである。仏陀だけ二重の頭光背をつけ、然も身光背をもつということは、このコインを作ったカニシカが、クシヤン朝が仏陀に対して他の神々以上の特別な関心、即ち民衆の熱烈な仏陀への渴仰崇拜を反映したものと見えよう。そうでなければ仏陀だけ特別なわけではないと考える。それに加えて、その施無畏印の掌中に、さらに白毫・吉祥相を加えたのは、仏陀の超越者救済者の一層の「慈悲」が渴望されて来たことを示しているのではなからうか。

⑦

これらのコイン上の仏陀像の諸相は、こうした人間釈尊から超越者・救済者仏陀を時代は、否その時代の人々は要

カニシカ 仏陀コイン「掌中の珠」の意味するもの

請してきたものといえる。即ち当時は小乗仏教の全盛時代であったが、大乘經典もぼつぼつ作り出されている。この大乘經典を作り出して来た社会的雰囲気は、釈迦を超越者として考へる傾向にあった。然して誓願のポーズをとる施無畏印の中に白毫が彫られ、仏の慈悲を強調、特に仏の方から慈悲を垂れるということを表す像がカニシカ時代に出ているということは、カニシカ在位約AD130-150年頃には、もうこうした「大乘的」な思想は出ていることを示していると言えよう。このことは經典成立史的に般若経・阿弥陀経・法華経がAD1・2世紀に成立しているという先学の考証と対応するものである。

⑧

このようにインドに生まれた人間釈尊はガンダーラにおいて、超越者・救済者釈尊になって行った。このことを筆者はカニシカコインの中の「ポドー」とある仏陀像に、特に誓願のポーズをとる施無畏印の掌中の珠、即ち「百祥印」を介して考察して来た。これによって、この時代に人間釈尊は超越者・救済者に、更に仏から、上から下へと慈悲を垂れる、「仏の誓願」としての慈悲行が強調される。否々、それ以上に庶民から「救って下さる」慈悲深い仏陀が要望されたことを表しているといえよう。その庶民の願いがこの像を作った。いわば仏教の思想の転換期がこの時代にあったことを筆者はクシヤンコインから推定するものである。

(註)

1. Edited by Catherine Jarrige South Asian Archaeology 1989 一二頁 カラチ博蔵モヘンジョダロ出土インダス

シール

- 2、身延論叢第一号(平成八年三月)筆者樹神信仰の系譜一九頁
- 3、栗田功 Gandhara Art 1. No.131, 255-266
- 4、Michael michiner The Ancient and Classical World 二五二頁—四三七頁のサカ・バルタイのロインはすべてギリシアのロインの伝統に則っている。
- 5、辨谷正雄氏インド仏教碑銘目録六二七・六四三・六五三
- 6、高田保氏仏像の起源 二三四頁—二三八頁參証
- 7、田辺勝美氏仏教美術一六一—二〇〇頁明白塔のイラン起源考  
——仏像のイラン起源論平説——
- 8、山本智教インテ美術史大観写真編二〇—一九四  
Rosenfield The Dynastic Arts of Kushan 1, Portrait Statue of King Vima Kadphises. Mathura 120, Lower half of portrait statue. Surkh Kotal.
- 9、Rosenfield 前掲書 V, Kushan Pantheon 85, 93
- 10、玄奘大唐西域記 迦畢試の項、大雪山頂の竜池の伝説
- 11、栗田功前掲書 I・II の仏菩薩の出土地別の表情の差比較参照
- 12、バグダット博物館展示
- 13、田辺氏、仏装一六一号窟明白塔のイラン起源 図二四・二五・三三・三六
- 14、田辺氏 IRANIAN BACKGROUND OF THE FLAMING AND WATERING IN KUSHAN PERIOD, THE ANCIENT Musium VOL. III. 1981, P. 79. 又 WIDENGREN, LA LÉGENDE RAYALE DE L'IRAN ANTIQUE, HOMMAGE A. GEORGE DUEZIL 1960
- 15、田辺氏前掲書七四頁及び WIDENGREN 同書
- 16、講談社オリエンツの魔窟 一二六頁  
アルダシユール一世の王権神授図
- 17、講談社 前掲書 一〇二頁・一一二頁 タレイオス一世墓 ナクシユ・ルスタム

カニシカ 仏陀ロイン「草中の珠」の意味するもの

カニシカ 仏陀コイン「掌中の珠」の意味するもの

- 18、バリ・ギメーミュージアム蔵 アフガニスタン・ショトラク出土 焰屑仏
- 19、講談社 前掲書一—三頁 神官立像 ハトラ・イラク
- 20、杉山二郎 錠光仏本生図と施無畏印の起源について  
——インド仏教に見られる西アジア的要素の研究—— この論文中写真10ハトラ出土ミトラ神浮彫
- 21、ラホール博物館蔵奉獻ストウバー及びローゼンフィールド前掲書 写真一〇五に施無畏の群像
- 22、たまたま俳優・緒方拳氏の「シルクロードを行く」テレビに同じ家の聖所が放映された。
- 23、栗田氏前掲書Ⅱ 九四 六三三
- 24、栗田氏前掲書Ⅱ 九七・一一七・一三三・二六九等
- 25、クシヤンのコイン中には弥勒仏と書かれたものもあって、授記された菩薩形の弥勒を即仏と考えたらしい。日本仏教学会年報五十一、筆者ガンダラ彫刻にあらわれた菩薩観四九六頁写真
- 26、ローゼンフィールド前掲書 コイン二二七・二二八・二二九・一三二
- 27、ミツチエル・チツチナー前掲書及び  
ローゼンフィールド前掲書のほかの神々の円光背と仏陀のそれとの比較対照
- 28、梵志額波羅延問種尊經に月氏に階級に乱れありと説き Marshall の大著 T'axia にタンクとミニチュアーのタンクの奉獻の実例を示している(庶民に救い)  
B. M. Mukherjee, Presidential Adress (Section I ancient Period)  
Indian History Congress Forty second Session Bodh-Gaya 1981